

〔論文〕

福音と文化

―日本における問題点をめぐって―

入 船 尊

はじめに

編集部から求められた内容は、宣教師経験者として、その経験をふまえて、日本における福音と文化の問題を論じて欲しいということであった。特別にこのような求めがあったということは、その経験をとおして、日本におけるこの問題について考えるヒントを提供し、私たちがともに自覚的にこれと取り組むための契機を作って欲しいということであろうと理解している。

最近福音派陣営においても、この問題が多くのお機会にとりあげられるようになったが、以前はどうであったのだろうか。戦後の日本の教会で、盛んに言われた言葉があるが、その一つは「福音の土着化」であろう。この意味するところは、どのようにしてこの日本にキリスト教が深く根をおろすことができるかということであった。日本伝道における前進が、日本という精神的、文化的土壌の中にしっかり根をおろすことをぬきにしてはありえないこと

を自覚したところからえたものであった。これが、今回においては「福音と文化」というテーマのもとに、再び関心と呼んでいるのである。

したがって、自覚の程度には差はあっても、日本の教会は、この問題と取りくんで来たのである。しかし十分に取りくまれたかという点、そうとは言えないであろう。それはなぜかと言えば、福音主義陣営においては、文化の問題を神学的な問題として自覚することが弱く、文化は福音に対立するものとしてとられる面に集中されて来たからである。文化も神からのものとして全体的にとらえる神学を持たないがゆえに、これに真剣に取りくむ姿勢が生まれて来なかったと言えよう。日本文化を考える場合も、福音伝道の障害の面だけに集中されやすく、日本文化そのものを深くみつめ、研究する姿勢や意欲が育たなかった。これを今後どのように克服し、道を開いて行くかが大きな課題であろう。

立場を異にするとは言え、その点カトリック陣営は、福音と文化の問題にまことに意欲的な取りくみをしていることは注目すべきであろう。これらの点にもふれてみたい。

宣教師としての経験をふまえて、この問題をとりあげて欲しいと求められたことの背後には、自国にいるよりも、異文化の中で福音伝道をする場合、もっと鮮明な自覚が求められるゆえに、問題提起もまたそのようにすることが望まれるであろう。そこで、できるだけ率直に、問題点について考えさせられたこと、現在考えさせられていることがらを述べてみたい。

宣教師として直面する課題

自国の伝道においても、福音と文化の問題は避けては通れない問題であるが、自分自身が生きている自国の文化の中における伝道であるゆえに、いつもそれが自覚的であるとは言えない。

一方、宣教師の場合を考えると、福音を伝える対象の文化は、自らが生きている文化とは異なっているゆえに、これを自覚的に知ろうとしないかぎり、まずコミュニケーションを成立させることも困難である。宣教地で文化を自覚的に考えようとするとき、必然的に、文化を部分的な何か、としてとらえることはできない。人間が生きて、生活している状態の全体としてとらえるほかはない。自国で生活をしている場合は、そういう生活の細部にわたるまで自覚しているわけではないゆえ、その民族固有のものが典型的に形を成しているものを文化ととらえるようになる。日本文化という場合、日本独特な美意識から出て来る芸術や、建築などの文化様式を中心として考えられる。しかし、異文化の中では、コミュニケーションの手段からして、文化としてとらえないかぎり、伝道は成り立たない。つまりその民族を民族たらしめているもの、その民族の固有な生のあり方そのもの、あるいは広い意味でのライフ・スタイルと考えられる。このように見えてくると、文化は、神が人類をこの地上に住まわせられるときに、とることを許しておられる生活形態とも想定することができる。ここで考えているものは、文化というものの、最も基本的な面をふまえておくことの必要性である。というのは日本において福音と文化というとき、福音伝道をするうえで対立し、障害となる日本文化の一面だけが強調される傾向があるからである。この面の巨大な力はどんなに強調してもしすぎることはない困難性をもっているのであるが、ことがらを全体的にとらえるということのゆえに、最も基本的な面を見逃してはならないということである。

宣教師がまず、マスターしなくてはならないのは言葉であるゆえに、宣教師が宣教地で自覚する文化の最も第一義的なものは「ことば」の問題である。そして、その言葉が民族の精神、文化に及ぼしている関係に目をとめざるを得ない。それはまた次のようにも言えるであろう。民族の精神、ところが、その言葉を形成しているということ

である。宣教師経験者として、福音と文化を考える場合、まず、言葉に思いが向くようにされたということはないという大きな意味を持っているかということを見ざるを得ない。もしこのことがなかったならば、日本伝道において、日本語というものに関心を持つことは弱かったであろう。

福音伝道における重要な位置を占める説教について、日本語で書かれた書物は多いとは言えないのであるが、特に日本語との関係で書かれたものは少ない。このことは、福音と文化が論じられているにもかかわらず、その文化の基本としての日本語を自覚的にとらえることの自覚の弱いことの現われと言えよう。それでいて、日本における福音伝道は、実にこの日本語でなされているのである。日本伝道における福音と文化は、何よりも、福音と日本語の問題として自覚されなくてはならないであろう。日本語を自覚的にとらえ、この言葉を用いて福音を提示することに意を用いることが余りにも欠けているとするなら、私たちは、日本における福音と文化の問題の第一課としてとりあげねばならない問題を見落としていることになるであろう。

そういう意味で、四国学院大学の石丸新教授が「パブリック・スピーキングとしての説教」（聖恵授産所）の著作によって、この問題の重要性を訴えておられることは注目し得るであろう。題名からして、説教の演術における技術的なことのみを問題としているかのような印象を与えるかも知れないが、これは、まさに福音を日本語の問題、説教における日本語の問題をテーマとするものである。

以上が宣教師経験者として、自覚させられた第一のことである。

日本語と文学の問題

同国人に伝道する場合、そこには同じ文化によって結びつけられているという関係が成立している。生まれながらに使用している日本語を用い、日本食を食べ、日本人的美意識を持って生きているゆえに、相手がだれであろうが、まず耳を傾けてくれる。宣教師の場合はどうであろうか。宣教師は、宣教地の人々にとって、自分たちとは違った文化に生きて来た「よそ者」である。よそ者がよそ者のままであるかぎり、コミュニケーションは成り立たない。相手との関係の面を拡大するための努力が求められる。まさにその第一のことがすでに述べた言葉の問題である。それは必要上、言葉をマスターすること以上のことである。この言葉を愛して、その民族のこころの現われとしてのことばの優れた面を発見することである。愛することなくして、その言葉を十分にマスターすることはできない。例えば、外国人であって、日本人も関心するほどに日本語をマスターしている者は、一人の例外もなく日本語の持つている特徴を発見し、これを愛している者である。インドネシア語と日本語を比較するとき、日本語は、はるかに微妙なニュアンスに富んだ言葉である。それを駆使することによって、かくも美的な世界を作り出されるかということへの驚きを、私たちは作家と言われる人たちの作品に覚えるのである。日本語というもののニュアンスに富んだこの豊かさは、用いる人によって、かくも違うものであるかという結果を生み出してしまふ。インドネシア語においてもそれは言えるが、日本語が、語る相手によって幾通りの表現でも用いられる言葉だからである。言いかえると、語る相手を深く意識して成り立つ関係的意識の強い言葉だからである。それは一人称にせよ、二人称にせよ、沢山の表現を使うこと、敬語的表現にも現われている。このことが日本語のニュアンスの豊かさのすべてではないが、大きな部分を占めることは確かである。

日本伝道を考えるとき、福音と文化の問題をとりあげるとき、日本語のマスター、特に日本語を話し、書くことにおける習練をどれだけ自覚的に考えてきたかが反省させられる。キリスト者たちの書く日本語は、日本人が読むとき、日本人の言語の感覚に合った、日本人の心をとらえるに十分なものであったであろうか。内なる世界、仲間

の世界でしか通用しないような日本語文書をしか生み出せなかったこと、広く日本人の心をとりえる日本語の書き手を生み出すことが少なかったことは、日本伝道の前進と無関係ではないであろう。皮肉なことであるが、これらのことについては日本の教会の外にあった者たち、すなわち無教会主義者たちの中に、多くの優れた書き手を生み出したのである。その筆頭に挙げられるのは、なんとと言っても内村鑑三であろう。彼の日本語は、日本人の言語感覚を正確にとらえ、当時の日本語の名文にある端正さとリズム感を豊かに兼ね備えたものである。日本語の名文は、朗誦への意欲を駆り立てるほどの力があるが、彼の文章もまさにそうである。

それに、よく指摘されるように、彼の日本語は英語をマスターした者においてはじめて現われる、英語的な論理性、明晰性を持っているという点が注目されねばならない。言葉の感覚の貧しさと、主体性の確立の強固でないところでは、外国語を学ぶという点は、その外国語によって自国語が影響を受け、支配され、自国語の固有性が見失われるということも起こり得る。例えば英語に親しんでいる者の日本語が、翻訳調の日本語になったり、外国語がふんだんに用いられて、日本語にとって代わるような現象である。

内村においては、彼の強烈な日本人としての自覚、二つの丁を愛すると断言したほどの愛国心が、彼の日本語にも見られる。彼の場合は、英語の論理性や明晰性さえも、日本語の形成のために用いたのである。日本語が英語に支配されて、バタ臭いと言われる日本語になったのではない。指摘されて初めて気づくほどに、英語の特性は、日本語の世界に消化され、仕えるほどに駆使されているのである。それと反対は、その人の日本語の方が、いつの間にか無国籍の言語になるほどに、主体性を失っているのである。

教会側からは彼らを越えるほどの質と量をもった、一般日本人にも通用する日本語の書き手を育て得なかったことを率直に認めざるを得ないであろう。

その原因はどこにあるであろうか。この問題を次に探ってみよう。

プロテスタントの陣営は、全くそのような書き手、あるいは作家と言われる者たちを持たなかったであろうか。持たなかったのではなく、育て得なかったのである。プロテスタント陣営の文学者の系譜を見ると、島崎藤村、有島武郎、正宗白鳥などの背教者たちが頭に浮かんでくる。ただし正宗白鳥は死の直前、植村環牧師の前で信仰を再び告白して、話題となった。これらはごく一部の者たちであるが、受洗まで行かなくても、一時期教会に出席したり、熱心に聖書を読むことによってキリスト教と関係を持った者は多い。それにもかかわらず、彼らが文学者であることと、キリスト者であることを両立させ得ないとの結論に至ったのは、現実にはそれができなかったのはなぜであろうか。福音と文化の問題を考えると、避けてはならない問題であろう。

次にこのことを歴史的に見てみよう。

日本のプロテスタント教会は、まだ彼らの文学活動を支え、指針を与え得るほどに、福音理解において成熟してはいなかった。日本のプロテスタント教会は広い意味でピューリタンの影響を受けた宣教師たちによって福音が伝えられ、建てられた教会であるから、禁欲的福音理解の強い性格を持っていた。

加えて日本人の道徳を重んじる、徳修を目的とする生き方の人生観と結びついたとき、キリスト教はきわめて倫理主義的な傾向の強い性格を持つに至った。当時の日本人一般の生活は、今日では想像することも困難なほど貧しいものであり、食えることが精一杯というのが平均的日本人の生活であった。そのような状況の中で酒を飲むことは、生活の破綻を意味し、特に一家の主人が酒をたしなむことによって、家族は貧のどん底という悲惨に甘んじね

ばならないことは、どこにも見られたのである。したがって、酒をやめることは、文字どおり社会的に、生活的に救いであつたのである。キリスト教は禁酒、禁煙に強調点を置き、この運動に指導的働きをなしたことは、歴史的には深い意味を持つていたのである。このことはプロテスタント伝道の初期において、キリスト教が日本という異教社会に市民権を得るための第一歩を築くために必要なことでもあつたのである。立場はどうであれ、キリスト教は、清い生活をめざす倫理性の高い宗教であることを日本人に知らしめたのである。このこと自体は十分に評価すべき点であろう。

さらにこの問題を全体的に考察するとき、倫理的性格を強く持つキリスト教は、文学者たちにはどのように写つたかを見なければならぬ。

キリスト教は高い倫理性を持った宗教であるが、それが倫理主義的傾向を強く持つとき、本来的な意味での倫理性よりも、律法主義的倫理性を持つに至る。キリスト教本来の倫理性は、生ける神を愛し、従う結果としての、主の律法を愛する生活である。これらのことは、特に詩篇に豊かに現わされており、主への生々とした服従から来る律法への愛である(詩一九・七—一一)。律法主義的倫理主義は、主との人格関係の確立よりも、性急に倫理的な生活の確立を願うあまり、豊かな成熟を持つよりも、様々な規定で縛ることににより、それを達成しようとするようになる。このような性格を持ったキリスト教に接したとき、文学を志す者の人間的苦悩、罪の現実から出てくる背徳性が、決して容認はされないとの子感を持ってしまったであろう。そして文学とは不道德なものとの断罪を免れることはできなかった。

明治以来、戦後に至るまで、日本は儒教道徳を背景として、徳修に力点をおく社会であつたがゆえに、ここに入つて来たキリスト教もまた、倫理的な性格の強い、徳修に力を注ぐものとなることは避けられないことであつたであろう。徳を修めることそれ自体が問題なのではない。それ自体は貴いことである。問題はそのことによって、福音そのものの理解への成熟が妨げられはしなかつたということである。福音とは何であるか、ということの追求が倫理主義の陰にかくされるといふことが起こつたのではないかということである。

福音とは何か

それはまさに罪人なる人間への神の赦しの告知である。罪人が、罪人なるままで赦されて神の前に生きることのできる道の宣言である。それゆえにこそ罪人を招き、受け入れることのできる道である。イエス・キリストによる贖罪のわざに基礎づけられた、客観的な赦しの道である。本来なら赦されざる罪人が赦されるという意外な告知である。それゆえにこそ福音なのである。

律法主義的倫理主義は、この福音の本質を見逃しやすいついのである。赦しの宣言よりも、高い倫理性を先に要求するのである。そこでは結果として不道德なる者ははじき出される。イエスの招きに与つた者たちは、誰よりも取税人、遊女という罪人たちではなかつたであろうか。しかし日本のキリスト教会は、暗黙の内にそのようなものを拒んでいる。人並以上の善男善女の集うところなのである。今日においてもそうであるならば、戦前までのキリスト教会の倫理主義的色彩の強さはどれほどのものであつたかは理解できるであろう。

倫理的志向の強い者たちをとらえることにおいてはある程度の力を持つたが、日本のキリスト教は、罪人である人間実存の深みで苦悶しつつしか生きられないような文学を志す者たちを遂には、信仰が遠ざけ、閉め出すほかほなかつたのである。キリスト教から離れて行つた彼らも、キリスト教を倫理主義としてとらえていたがゆえに、自らの文学的営みと両立できないことをいやがうえにも自覚せざるを得なかつた。

福音主義は、罪人なる人間のままで招き入れる道であることを述べたが、もちろんそこにとどまるものではない。めざすところは、福音による救しに基礎づけられた主との人格的關係の確立による、主の律法を愛する生活である。高倉徳太郎の「福音的基督教」は、日本のキリスト教の出版史上、特筆すべきものであるが、これはまさに、人間中心の倫理主義的キリスト教に対して、啓示の客観性に基づく福音の強調をめざすものであった。

以上見て来たことは、一般的に言って日本のキリスト教が倫理主義的色彩の強さのゆえに、文学を志す者たちを受け入れることができなかったこと、このことは、日本語という日本文化の根底をなす分野において、十分な業績と証しを積み上げることができなかったことを注目するためであった。

キリスト者と文化創造の使命

福音主義陣営において、「福音と文化」が問題にされるとき、その関心の中心にあるものは何であるかを考えてみたい。次に述べることはその中心であることは間違いないであろう。それは福音伝道において、障害となる日本文化の問題を直視し、それをどのようにして克服して行くかということである。ここでは文化は、福音伝道のために副次的な関心である。中心にあるのは福音である。福音は神からのものであるが、文化は福音に対立する面のみがおもにとり上げられる。

福音派はこのように、文化を福音と対立するものとしてとらえる傾向が強い。意味のあるのは福音に伝える伝道だけであり、それ意外の働きの意味は小さいのである。このことは確かに、すべての関心と意味とを伝道に集中することになるから、伝道にはある力を発揮することができる。この面の評価は明らかである。しかしながらここでは、日本文化にしても、聖書的に根本的に問われることは少ない。日本文化はもっぱら福音伝道に対立する面のみが目される。この面は見過ごしにされてはならないゆえに、あとで取りあげたいのであるが、問題はそれがすべてではないということである。

世界とその中に満つるいっさいのものの起源を神の創造におくことは、福音主義者の共通の理解ではないだろうか。そうだとするならば、日本人、日本文化の中に神よりもを認めざるを得ない。福音派は、福音理解が、罪と救済にのみ集中して、全体性を見失うことによる欠けめを持つことになる。その一つが創造論である。パウロが述べているごとく、神が諸民族をおかれることが、神の創造のあり方だとするなら、日本がこのようにおかれていることの中に、神の意図を見なければならぬ(使徒行伝一七・二六)。ここに私たちは、日本人であることの自覚を徹底させられるのである。私たちは神の創造による日本に、日本人として存在されられているゆえに、ほかでもなく、日本人であることに徹底しなくてはならない。神の与えられている日本人の固有性を発見し、自覚しなくてはならない。

内村鑑三における「二つのJ」に仕えるとの自覚の根底にはこのことがあるのである。彼の場合、絶対的、超越的三位一体の神を信ずるゆえに、日本にある神観と対立したが、キリスト者として自己を確立することは、中立的な何かによってではなく、具体的に、深く日本人としての特性に根ざしたものであったゆえに、強烈な日本人としてのキリスト者の形成となった。その結果は、周知の如く、アメリカ的キリスト教、物質主義的、成功主義的キリスト教への果敢な攻撃となって現われた。だから、彼のキリスト教には、鋭く日本と対立するものを持つと同時に、神の創造による日本と日本人の肯定に根ざす、非キリスト者の日本人意識にも優る日本人的自覚に至ったのである。このことが、彼の著作がキリスト者と非キリスト者とを問わず、日本人の心をとらえてやまない理由なのである。福音派はその日本文化の全体的とらえ方を欠いているゆえに、このような日本人意識に至ることができず、あた

かもキリスト者であることは、日本人であることを脱出し、中立的な人間になることであるかの如き立場をとることになる。福音派キリスト者の中に、日本史や日本文学への関心の低いのはこのためである。そして、福音派陣営の中から、広く日本人の心をとらえるような文学が現われて来ないのも不思議なことではない。

福音派陣営が、日本における福音伝道を歴史的な、長期的展望に立って考えようとするなら、日本文化の福音伝道における対立面だけでなく、関係の面、即ち神からのものとして評価し、生かすべき面を自覚的にとりあげることは避けられないであろう。その時、日本語に対しても自覚的になり、日本人の心に広くとどく、文書が生み出されてくるであろう。

文化は消極的な意味だけではなく、神が世界を創造され、そこに人間をおかれた時に与えられた文化命令に根ざすものである。(創世記一・二八) 地を治め、管理する者として人間は文化創造のわざに励まねばならないのである。文化は神の栄光をあらわすわざである。聖書の光に照らしてみるならば、文化も神から来、神に栄光を帰する被造者、人間に与えられた栄光ある使命である。

人間の墮落は、神が目的であり、神に栄光を帰すべきものを、人間におくようになった。本来の目的の転倒である。文化創造のわざは、人間に与えられた力の誇示に向かい、人間に栄光を帰することになった。それゆえにこそ文化を福音と対立的のみとらえる見方が強くなったのであるが、ここではまた全体的視点を見失うことになる。文化をはなれて人間は生きることができない。好むと好まざるとにかかわらず、日本人キリスト者は、日本文化の中に生き、日本文化を用いて、福音伝道もなしているのである。日本語をはなれて、日本伝道がないことを見てもこのことは明らかであろう。

日本文化を十分に評価し、生かした教会堂の建設、日本人の宗教性にふさわしい祈りと瞑想の場の設定、日本語の美しさでもっと豊かに表現されるべき讃美歌の可能性、文学の分野における課題など、あげていけばきりがない。神から離れた人間の、人間理解は混迷をきわめ、矮小化され、文学の世界はますます混沌としている。神を離れたということは、世界と人間に対する統一的な解釈の原理を失ったということである。被造物は神のもとにあるときにだけ、その全体的理解と視点を持つことができる。神を離れることは自己を統一するものを見失い分裂へと向かう。M・ピカートが現代人をアトム化された人間としてとらえているのは注目に価する(『騒音とアトムの世界』みすず書房)。アトム化された人間は、もはや人間も世界も全体的にとらえることはできないから、人間理解は浅く、部分的になり、文学、思想のスケールも小さくなる。

本来の人間のスケールを回復し、これを福音伝道のみならず、文化創造の技の中に実現することはキリスト者のみに課せられている使命である。このような文化創造のわざの使命に目覚めるとき、福音伝道の障害としての文化という部分的な関心から、この問題の全体的視野を獲得することになると言えよう。このことは日本において、福音派が真の意味で市民権を得るためには、避けて通れない点であろう。そうでなければ、日本文化を正面から問題にすることもできず、日本文化の側面に立ちつづけることになるであろう。そのためにこそ、福音はもとより、文化の聖書的、神学的再考が求められていると言えよう。そうでなければ、福音派陣営は、伝道者にならない若い世代に対しても何ら積極的なキリスト者としての使命感を与えることはできないであろう。

福音の力はたんに魂の領域のみならず、文化の領域にまで及ぼされなくてはならない。つまり、イエス・キリストの十字架と復活によって、神のもとに、永遠の命に回復させられた者は、文化創造のわざにおいても、神に栄光を帰する働きへと召し出されているのである。文化の問題は、福音伝道のための副次的なものではない。神から託されている、本来の人間の使命の問題なのである。アブラハム・カイパーの「カルヴィニズム」は、これらの問題

を考える最も基本的な問題を明らかにするとともに、文化創造の使命に目を開かせる。文化に対するこのような理念と視点が、西欧社会のキリスト教伝道にどれほどの力となったかは計りがたいほど大きなものである。

福音と文化は、対立的にのみとらえられることなく、福音と文化をもって、罪に落ちた被造世界を回復し、再創造する働きの使命を果たさねばならない。そうでないならば、福音自体をも部分的にしかとらえることができず、福音の力を限定していることになるのである。福音は人を救い出すとともに、神に栄光を帰する、新しい文化の創造に人間として生かされる力である。

日本文化との戦い

さて次に、福音伝送における日本文化の障害の面を見すえておかなくてはならない、唯一の真の神を崇めないところでは、人間の内に与えられている宗教心は、神以外の被造物に結びつく偶像崇拜の形態となる。祖先崇拜から天皇崇拜を頂点とする、日本民族の宗教形態は、第二次大戦後の変革によっても本質的には変わらなかった。国民統合の基盤として、天皇制の協力的な復興を目指す試みは、昭和天皇の大葬の礼、今年度行われる即位の礼、大嘗祭を用いて、最大の効力を発揮すべく進められている。

天皇神格化を徹底して相対化するだけの神観の確立が福音派陣営の中に見られるであろうか。幸福主義的キリスト教信仰は、幸福を妨げる戦いを回避しようとする。幸福主義的キリスト教に墮するならば、そこにある人間中心主義によって、神の栄光よりも、人間の幸福を優先させる誘惑に打ち勝つことはできない。私たちに求められているのは、さらに進んで日本人の精神の中にある偶像崇拜的構造そのものを見究めることである。

経済的成長は、たしかに日本の国力を増大させた。戦後のめざましい発展は、世界の国々をして「奇跡」とまで言わしめるほどのものであった。永い歴史の中で培って来た日本民族の能力、勤勉な資質に加えて、そのエネルギーはどこから出て来たのであろうか。これこそがまさに、経済成長を至上とする、このことのためには死さえもいとわない程の献身ぶりによるのである。それは言葉をかえて言えば、真の神を持たない日本人の戦後の精神的空白に、座を占めたのは、経済成長という新しい神、偶像であったのである。経済成長にかける日本人のエネルギーの中には、まさに宗教的と言えほどの迫力がこめられていたのである。

中曽根前総理はその在職中、しばしば次のように言ったものである。「多神教の国日本が一神教の国々に勝った」と。経済成長の問題を語るのに、宗教的表現が用いられていること自体、注目に値するのではあるが、経済成長は国を挙げての新しい宗教でさえあったのである。そうだとするならば、経済成長の現象の中には神の審きを免れない面をも見逃してはならないことになる。創造の秩序を無視するまでの労働、家庭の破壊、拝金主義、それにまつわる犯罪、享楽主義、自然破壊、国外への公害輸出による不信感などを生み出している。

聖書には物質を卑しめる思想はない。物質的富もまた神の賜物であり、これを正しく用いること、楽しむこともまた許されている(伝道の書五・一八―二〇)。しかし、同時に、物質的富、地上的快樂の追求が決して人間の内なる空しさを満たさないことも明言している。伝道の書の主題を、日本民族は今やかみしめることのできる地点に立っている。真の神の福音が力強く宣べ伝えられなくてはならない理由はここにもある。神以外のものを神とする偶像崇拜的、強力な日本人の思想を変革せしむるものは、神のみわざを全体的に、徹底して述べ伝える神中心のキリスト教である。この福音こそが、人間を真の意味で自由にするのである。

文化の創造の場としての世界

一般的に言って、プロテスタントが福音と文化を対立的にとらえ、文化の意味を神学的に基礎づけることができなかったため、キリスト教に接近した、あるいは入信した文学を志す者たちを生かす場を持たなかったことの一部にはすでにふれた。禁欲主義を問題にするとき、本質的にはそこにある節制や、忍耐が問題なのではない。禁欲主義と言われるものには、物質世界や、肉体の軽視という思想が根底にあることが問題なのである。これは精神と物質の二元論であり、一方を貴く、他方を卑しいとすることになり、神の創造のわざを全体的に認めないことになる。禁欲主義は、その行きつくところは、世界の軽視、否定となつて現われる。それは同時に文化の軽視、否定ともなる。禁欲主義の結果としては聖書の思想の基本的な面を受け入れることができず、外見上は信仰的に見えながら、聖書の思想に対立することになる。禁欲主義は文化形成の場であるこの現実世界を軽視するのであるから、文化を正しく位置づけることもできない。信仰のとらえ方が、その徹底によって、世界から脱出する方向を辿る。この世界は罪にまみれているゆえに、この世界での文化創造のわざには意味を見い出せないことになる。意味のあるのは福音伝道だけである。

グノーシス主義の根本にあるものは、霊と肉体の対立的二元論であり、キリストが眞の肉体をとったことをも否定するに至った。このことによって、福音そのものをとらえることから逸脱した。福音とは、実に神の子が眞実の肉体をとって、見たり、さわったりできるほどに、具体的に正体をあらわしてくださったことにある(ヨハネ第一・一・一)。ここにも肉体や世界の軽視があるゆえに、さまざま禁欲主義的生き方を強調するに至った。このような思想は、形を変えながらキリスト教の歴史の中に現われつづけ、眞のキリスト教理解の妨げとなっていることに注目しなくてはならない。

日本のプロテスタント教会の中にも、これと全く無関係であったとは言えない面がある。文化軽視の思想が混入して来たことを注意深く見なくてはならない。このことが、キリスト教が日本に市民権を持つための戦に障害とはならなかったであろうか。キリスト教は精神主義的な宗教で、心の問題に集中するものであり、この世界や歴史については正当な関心を持たないものであるとの見方を与えられなかったであろうか。

ここで注意しておかなくてはならないことは、禁欲主義には非聖書的な思想があるが、時になつた禁欲そのものは、信仰生活の中で正しく位置づけられなくてはならないということである。霊性の向上のために、祈りに集中するために禁欲をするということは、キリスト教の歴史の中で、大きな意味を持っている。今日においても節制の意味は大きい。

最初に、一般的に言って、と、プロテスタントの福音と文化の問題に対する考えを想定したのであるが、そこには、次のようなとらえ方もあるからである。福音と文化を対立的ではなく、福音そのものを相対化することによって、福音をも文化の一形態として吸収してしまう、いわゆる文化一元主義である。つまり、イエス・キリストの福音そのものを、人間の精神活動の中に引きさげることによって、この世の歴史の精神的、あるいは歴史的出来事とすることによって、キリスト教そのものさえ、一つの地上的現象と見てしまうのである。ここでは福音の超自然性が捨象されており、もはや本来の意味での福音ではない。自由主義の流れの中にある、福音をも文化としてとらえる、文化主義的キリスト教をも見なくてはならないわけであるが、ここにおける福音と文化の主題からは離れるので次に進みたい。

さて最後に、最近のカトリックの、福音と文化の問題に対する取りくみを見たい。

日本基督教団をはじめとするNCC系統のプロテスタント世界にまで発言を広げている井上洋治氏は、すでに『日本とイエスの顔』(北洋社)によって、福音と文化の問題を世に問うたのである。氏はフランスにおいてカト

リックでも最も厳しいと言われる修道院で、八年の長きにわたって修業した神父であるが、従来の神父のイメージをはるかに越えるほどにその活動ぶりは多様性に富んでいる。著作、講演活動もさることながら、東京において「風の家」なるものを設立し、著者たちを集めて、読書と思索と討議の生活をするという、ユニークな発想の活動家である。井上氏の周辺には氏の思想活動に共鳴するカトリック側の協力者たちが集まっているので、このような動きに注目することによって、今日のカトリックの中にある福音と文化の問題のとりえ方を知ることができるのである。前にあげた著作の他に『余白の旅——思索のあと』『風のなかの思い——キリスト教の文化内開花の試み』（山根道公氏と共著）などが、何れも日本基督教団出版局から出版されていることも注目させられる。つまりカトリックの世界を越えて、プロテスタントの世界にまで氏は意欲的に発言を上げようとしていることが伺える。この副題にもすでに現わされているように、そのめざすところはキリスト教を日本文化と対立的にとらえて来た伝統をきわめて自覚的に越えようとしていることである。氏自身が八年前の間西洋社会で形成されたキリスト教思想と生活様式の中で徹底して生かされることによって、果たしてこのような西洋的とりえ方のみがキリスト教のすべてであるか、との疑問を持つに至っている。西洋的なものへの没入と徹底の戦いは、その極みにおいて、東洋的なもの、日本的なものへの開眼、回帰となって現れている。日本の宗教、特に仏教思想、日本の古典、現代文学に至るまで、まさに福音と文化に取りくむ者にふさわしく、日本文化と正面からの取りくみが見られる。

対立よりも、関係の面にやさしいまなざしを注いで、日本文学、日本文化そのものの中に現れている日本人の心を大切にし、そこにキリストの福音を接触、関係づけようとするのが主眼とされている。

その結果はどのようなふうになるであろうか。

日本人の宗教観、宗教意識に対立するような伝統的にキリスト教理解を、果たしてそれは正しいのか、聖書的であるかと再考して行くことになる。例えば日本人の神観は旧約に現わされているような、父性原理としての神ではなく、弱く、悩める者をやさしく抱きかかえるような、母性原理の神であることに着目し、イエス・キリストによって示される神は、実にこの母性原理を明らかにする神であることを強調する。したがって、西洋人たちが強調して来た厳しく審く神は、ユダヤ教の神であって、イエスの示そうとした神を正しくとらえていないのではないかと問う。さらには日本人の神観が、超越的であるよりも内在的であることに注目し、聖書の神観は内在的な面をもってしているのであって、被造物と神を等しくとはしないが、被造物につながっているという面を強調する。したがって日本人が実在の中に神を見ようとする姿勢は、キリスト教信仰の中でも十分評価されなくてはならないと言われている。氏はこのような神観を「汎神論」ではないが「汎在神論」であると規定する。

立場の違いを越えて、福音と日本文化の問題を正面から、勇気をもって、誤解をおおそれず取りくんでいる姿勢そのものには、私たちの注目せずにはおれないであろう。無視することなく、このような試みを真剣に批判し、また評価することによって、私たち自身の取りくみについて、大きな刺戟とチャレンジを受けるであろう。

結び

以上、福音と文化について、宣教師経験者として、特に、日本文化について論じて欲しいとの要請に応えてペンをとったのではあるが、日本文化そのものについて論じることはまことに不十分である。カトリック側の対応の意欲と姿勢をみるについても、この点を深く示される。

福音主義陣営が、日本における伝道を長い歴史的展望に立って考えようとするなら、日本文化を神の創造論との関係でもポジティブにとらえなおし、関係と対立の両面から全体的にとらえる神学的視点の確立の必要をせまられ

るであろう。対立図式だけでなく、また関係に重点をおくあまり、自然神学的な方向をたどらざるを得ないカトリックの立場とは異なった、第三の道が求められると言えよう。そのためには、これが日本伝道そのものの課題であることを見究め、持続的な取りくみが必要であると言えよう。

(日本基督改革派、前インドネシア派遣宣教師、神戸改革派神学校教授)